

# J・F・ブレイの社会革命論(二)

上野格

一 はじめに

二 社会革命論

I 理想社会と現実

II 社会改良

(以上前号)

III 政治的変革と社会革命(以下本号)

IV 移行期の社会(1)、移行の方法

V 移行期の社会(2)、その効果

III 政治的変革と社会革命

前段に見た政治的経済的諸改善策を批判するブレイの態度は、現体制の根本的変革という太い一本の線をあくまで貫き通す性質のものであったと云えよう。この態度を彼は、次のようなたとえ話でも示している。

J・F・ブレイの社会革命論(三)

「これらの改善策には全体として一つの原則または性質がある。それは、結果をなくそうとめくらめつぱうにわけもわからず苦勞して、そのくせ苦しみの原因を神聖不可侵のままにしておくことである。船には浸水がおこっているのだ、それなのに、あのいろいろな中途半端の改善策は、この浸水をとめることではなく、流れ込んでくる水を掻き出すことばかりかかざらわっている。また、脳足りんのおしゃべり共 shallow-pated drivellers にも事欠かない。彼らは事態がさっぱり分らずに、浸水をとめるかどうかではなく、一定の時間内に、水をバケツに一杯満して捨てるか、それともバケツ半分づつ二度にして捨てるかと深刻に論じてあっている。<sup>88)</sup>」

<sup>88)</sup> Labour's Wrongs, p. 98.

このたとえ話で注目すべき点は、「脳足りんのおしゃべり共」とはいかなる人種かである。勿論、前段に見た諸改善策を提示し論じている人々には違いないのだが、ブレイ自身が具体的に指名するところでは、それは、まず、「労働者階級としての労働者階級の状态的改善」しか見れぬ政治家共<sup>87)</sup>と労働組合指導者達<sup>88)</sup>および「資本家とはこういうもの、労働者とはこういうもの」と知っているだけで、その提示する改善策は何ら實際的でなく、まして、究極の目的を達成するには全く不適當な、政治経済学者達である。彼らは、いわば、指導者としてだめな存在であるが、ブレイはこれに加えて、運動の主体、主力である筈の労働者階級も差当りだめな存在としてとらえている。何故なら彼らは自分の力で正しく問題を考えず、政治家たちのような「その社会的地位と、それに結びついた独得の偏見からして必然的に弱い闘士でありめくらな指導者である人々の保護と指導に自分たちの運動を全くまかせきっている」<sup>89)</sup>のであるから。このお人好しの労働者階級は、たとえ話の「おしゃべり共」で

はない。しかし、事態が理解出来ておらず、自力では容易に動きださぬという点で甚だ困った存在なのである。

⑧ Ibid, p. 98. 傍点はイタリック。 ⑨ Ibid, p. 100.

⑩ Ibid, p. 106. ⑪ Ibid, p. 99.

では、政治的変革 governmental change, political change とは何か。政治革命 governmental revolution と区別された意味でのそれは、前段で見た政治的改善策、例えば、有権者の拡大、労働時間の短縮等々<sup>44</sup>であって、これは政治家をはじめとするあのための指導者たちによって推進されている仕事のすべてである。

何故政治家たちはそうした改善策のみを提示するのであるうか。第一に、彼らには現体制以外の社会体制を思い描くことが出来ないからである。

「様々な政治協会や組合がこれまで時々結成され、特定の政治的変革を行なって労働者階級に利益をもたらそうとしてきたが、彼らの貧乏を排除したり雇用を増加させたりすることで大衆の条件を良くするために何の役にもたたなかった。単なる政治的変革の主唱者たちは大部分が、人間の性質や欲求や能力について狭い一面的な見方をしてきている。彼らは社会を単純にそのまま——抑圧された労働者階級と抑圧する支配階級で構成された——眺めているにすぎない。彼らは、人間社会が、自分たちの見ているのとはちがった構成をとる可能性に全然気付けないようだ、だから、彼らの政治的改善策には全部労働者階級——不可避的に他階級の召使いまたは奴隷たるべく明らかに運命づけられた——として、労働者階級の状態の部分的改良以上のものは視野に入っていない。こうだから、これまで求められ獲得されてきた政治的改善策はすべてが——労働者階級を作り、それを抑圧し墮落させてきた諸原因に届かぬものだから——問題にされている抑圧

や墮落を取除くのに何の役にもたたぬのは当然である。<sup>42)</sup>

<sup>41)</sup> Ibid, p. 106.

<sup>42)</sup> Ibid, p. 98. 傍点はイタリック。

第二には、彼ら自身の階級の利害が、社会的変革を拒むからである。

「彼らは労働者に、殆んどいつも、政治的改革や政府改良に救いを求めるよう教える。だがこうした助言者の大多数は労働者階級に属しておらず、従って、労働者が何を苦しみ、どう感じ考えているか知らずにいるから、どんな種類の救済策が必要かを知っている筈がない。更に、万一これら民衆の指導者たちが真の苦難と真の救済策を知っていたとしても——貧乏人たちの貧困と労苦が金持たちの富と怠慢の必然的な結果だと知っていたとしても——金持と結びつき、金持と同じように地代や利潤で暮しているという彼らの社会的地位そのものが、彼らをして労働者階級の利益に対立させ、労働者階級の希望に反対させる。一方の支配は他方の被支配があつてこそ存在する——この支配を政治家どもは決して覆そうとはしない——つまりは、人間と方策とは一対のものであつて、どちらも苦難の究明に向うわけではなく、どちらも救済策を指示するわけではないのである。<sup>43)</sup>」

<sup>43)</sup> Ibid, p. 99.

こうして、「おしゃべり共」の第一のグループは全くのところ有害無益であり、彼らの説く政治的変革、つまり、労働者階級が彼らの指導の下におとなしく従う種類の変革は欺瞞でしかないのである。では、労働組合 'trades' unions についてはどうであろうか。これも基本的には第一のグループと同じ誤りを犯している。だが、二つの点でブレイの評価は政治家およびその組織する政治組合とちがうようである。その第一は、組合の活動

が、賃上げという直接的な方法で、奪われた莫大な富の一部を資本家から、強制的に取もどす運動、すなわち、事実上、平等な交換の原則にしたがい、労働の全価値を獲得する方向で活動する存在であること、第二は、組合と指導者を分けて考え、組合活動の失敗の直接的な原因に、指導者の背任、横領その他の不正と専横をあげていることである。<sup>44</sup> 第一の点は、唯一の眞の救済策が資本家や資産家の数をへらすこと、つまり怠け者をへらすことであり、それによって労働者階級の分前は増加することを明らかにするという効果がある。政治的変革をこえた問題解決の方向を示す力を労働組合は基本的にはもつと云えよう。<sup>45</sup> 第二の点は、おそらく、ブレイ自身の経験に基くものと思われるが、彼が同時代人に対して抱いている或る種のいらだちを示すものとして、注目に値する。彼は現体制下で生活している殆んどすべての人間——指導層であれ労働大衆であれ——が、そのままでは社会変革の荷い手になれぬことに、かなりのもどかしさを感じていたのではあるまいか。彼の描く先覚者、個人としての前衛は、必ず為政者に処刑されることになっており、その場合、大衆は必ず為政者に盲従し、その告発の叫びを口うつしにまねてわめきたてる。「労働の苦難」および「ノートピアからの航海」に描かれた前衛の日常性を脱した彗星の如き輝きは、<sup>46</sup> 運動の組織者としてのブレイが、表面に出して見せてはならぬものを、いわば逆の形で表現したものと受取ることができよう。

<sup>44</sup> Ibid, p. 100.

<sup>45</sup> Ibid, p. 102.

<sup>46</sup> Ibid, p. 26, 27. A Voyage from Utopia, London, 1957, p. 93~98.

では、政治経済学者についてはどうであろうか。ブレイはこれを二種類に分けて扱っているようである。ブレイの引用は、読者に先入観を与えぬよう、一切、出典を明さずになされているため、ジョリフ女史 M. F. Jolliffe

に従ってその名前を推定すれば、第一に、スミスとリカードであって、彼らは、主に、労働価値論による諸定義を労働、資本、通貨について与えた経済学の権威として引用されている。これと同じ扱いを受けているものには数値に関してコフーン Colhoun がいる。マルティノー Harriet Martineau もそうであろうと思われるが、この点については、筆者はまだ確認を出来ないでいる。第二は、さきに見た政治家、労組指導者らと同系列の、むしろそれより大きなマイナスの影響を与える経済学者であって、これはチャールズ・ナイト Charles Knight を代表とするようである。

④ Jolliffe, M. F., "John Francis Bray," *International Review for Social History*, Volume IV, 1939, p. 3.

スミス、リカードらは、その説くところが共同出資 joint-stock の社会で実現することを示すために引用されている。つまり、無名、無教養なブレイではなく、指導的な政治経済学の権威の説くところなら聞くという俗物たちへの挑戦または最後の説得として引用されている。これは、経済学の基礎理論が、それを説く本人の思想的立場とは別の社会的役割を果していることの良い例である。これと並んで、チャールズ・ナイトはブレイによって非常に逆説的な役割を果させられている。彼は、一方では第一義的諸原理が「社会で作用し、諸権利の平等が維持される方法」を三大条件Ⅰ、労働がなければならぬ、Ⅱ、以前の労働即ち資本の蓄積がなければならぬ、Ⅲ、交換がなければならぬⅡという形で明示した政治経済学者であり、他方では、賃金基金説を振かざして労働者に資本への服従を説く経済学者なのである。

③ *Labour's Wrongs*, p. 194.

④ *Ibid.*, p. 95.

⑤ *Ibid.*, p. 42.

ブレイの云う三大条件は、チャールズ・ナイトが *Capital and Labour*, London 1831. の第一章に提示したものである。このことは、単に三項目の表現が同じであるばかりではなく、政治経済学者がこの条件を必要と考える理由についてブレイが引用している部分―「有用物 Utility すなわち人間の生活を維持し、らくにし、愉快にするものの生産に必要」<sup>60</sup>―もナイトの本文に全く一致していることから明らかである。ナイトはこの条件を資本、労働、機械の三者が生産に不可欠であること、資本と労働の利益は同一であること等々を説くために提示したのであるが、ブレイはこれを逆に利用したのである。すなわち、この三大条件には何の限定もつけられていないのであるから、全く平等な人間相互の関係を規定するものである。平等な労働、平等な蓄積、平等な交換、従って、政治経済学者の説くこの条件は、資本による労働の搾取が廃絶されなければ実現しない。換言すれば、政治経済学者は、この三大条件を説くことによって、共同出資の社会の実現つまり社会変革の必要を説いていることになるのである。有用知識普及協会のパンフレット作者としてナイトは一八三〇年代にはかなりの有名人であった。特にその著書 *The Results of Machinery* は一八三〇年の初版以来一八四五年までに五万部売れ<sup>61</sup>、三年刊行の *Capital and Labour* も同じように盛んな売行を示したようであるから、この三大条件は労働運動関係者にとって周知のものであったと考えられる。ブレイの皮肉なナイト批判は、引用の出典が示されていないだけに一層効果的に、仲間の哄笑を呼んだことであろう。

<sup>60</sup> *Ibid.*, p. 42.

<sup>61</sup> Knight, Charles, *Capital and Labour*; including *The Results of Machinery*, London, 1845, p. vii.

資金基金説については、ブレイは正面から批判を繰返し、問題は、「働き手が余り、原料が余っていて、利用

できる生産物が少なすぎることを、「農業労働者が余り、耕されぬ土地が多く残っていて数千の労働者がパンを得られぬこと」にあるのであって、「生産のために用いられる資本つまり貨幣の量は限られていて、週20シリングなら一定数の労働者……その四倍の数なら5シリング……つまり労働者が多ければ多い程彼らは不利になる」などということではない、と指摘している。ナイトは、当時、その真正直な賃金基金説で、労働運動家の笑いものになっていたのである。ナイトはこう主張する。

もし賃金が下ったら、「その時は市場に労働が多すぎて賃金が低すぎるのであるから、賃金を引上げようとして団結してはいけない、雇主に強制して労働の維持のための基金以上に労働に支払わせようなどという無駄な希望を抱いて団結してはいけない。ただ市場から出てゆきなさい……。お前たちは、大体みな、自分を維持するのに自分の労働しか持っていない。何かほかのものを持ちなさい、何か頼れるものを獲得しなさい。労働過剰 glut of labour の時はすぐ市場の外に出なさい、そして自分で資本家になりなさい。」<sup>65</sup>

この“go out of the market”をブレイも先の場所に続けて賃金基金説の教えとして引用している。出る方  
法には移民もある。さきに見た移民策批判もこの意味で賃金基金説批判なのである。このように、政治経済学者  
チャールズ・ナイトは、スミス、リカードらとは異なり、労働者を体制に縛ぎとめておく誤った理論的指導者の  
代表として、かなり手ひどく嘲笑されているのである。

<sup>63</sup> Ibid, p. 105.

<sup>64</sup> Ibid, p. 103.

<sup>65</sup> Results of Machinery (2nd ed., 1831), p. 197-8, Brian Simon, Studies in the History of Education 1780-1870, London, 1964, p. 161 以下引用。



こうした様々の指導者やその説く政治変革ではなく、ナイトの三大条件を逆手にとった社会的変革または革命 social change or revolution は、労働者大衆の自覚のもとに、全社会的に遂行されねばならない。ところが、彼らを動かすのはそう簡単ではない。

「あるべき社会体制にとって何が基本的かを考察することと、現体制を転覆し望ましい社会を打ちたてることは大変にちがう。人々は慣習に大きく影響されるものであるから、たとえ大運動の目的とそれから得られる莫大な利益を示されても、たまたまその望ましい目的が直接目の前にあり殆んど苦勞なしに手に入るのでなければ、めったに動きださぬものだ。変革という考えは、もしもそれが日常踏みなれた普通の道をそれた方向に彼らをつれてゆくようだったら、たとえどれほど明るい見通しがあるうとも、大部分の人々をおそれさせる。彼らはモグラの土を山にさえしてしまい、つまずいても転びもしないものを、とても超えられぬ障害だとしてしまうほどである。だから、社会変革を実現する方法を考えるにあたっては、目的それ自体ばかりでなく、その目的を達成する種々の方法と、変革を望む人々が既に考えている方法の効率とが調べられねばならぬ。というのも、事業が失敗する原因には、不適当無分別な方法による場合とその完成に絶望する場合とがあるからである。」<sup>60</sup>

<sup>60</sup> Ibid, p. 119, 120.

彼らに火をつけるべく、前衛が彗星の如く日常性の軌道に襲いかかるのであるが、それだけでは臆した大衆を動かすに不十分である。こうしてブレイは一方では鼓舞激励を、他方では安心を与えるための説明をしなければならなくなる。

鼓舞激励は、第一に、変革が歴史的必然であり、物的社会的にもイギリスは既に条件をそなえていることを示し、第二に社会の変革は各時代のその成員一人一人の権利であり、しかも現代は世界をあげてそうした変革の時代ののだと示すことで行なわれている。

「現在の世代は来るべき世代に対して何の権利ももたず、彼らを縛る法や制度を作る正当性ももちあわせていない。すべての時代の人々は、等しく自由に、転覆し、修正し、設立することが出来る。決定版といったものはないのである。現体制の下では、将来の意見や慣行がその中に閉じこめられる境界を画すような成文法を作ることが支配者や政府の慣習であるけれども、そのような記録がみな一掃されてしまう時代が来るのである。」<sup>65)</sup>

<sup>65)</sup> Ibid, p. 177. この議論にはヘインの影が濃いようである。

「現在の危機は、どのような成行きをたどろうとも、事物の運行に伴う自然の動きである。それは事件の作りだす大海原であって、大波が永遠の昔から巻きおこり押寄せてきて、未来永劫へと怖ろしい力で進んでゆくのである。」

「現代は単に局地的な運動の時代ではない——それは、国や肌の色や信仰のワクをこえたものである——全世界 universe がその作用する領域であり、すべての人間にそれは及ぶのである。だから、社会的変革を考察するにあたって、人は現在の制度や規則にその探究を制限されるいわれはなく、又、変革をおし進めるにあたっては、特定の制度の——たとえその性格や目的が何であらうとも——見せかけの神聖さに、縛られるいわれはないのである。そうした制度はすべて様々な時代に様々な目的で作られたものであり——同じよ

うな時代に同じような目的で修正され改良されてきたものであり——今日の人々は、以前の人々が設立し維持してきたのと同じ権利と力でそれを転覆することが出来るのである。こうした運動と変革がすべて革命である。」<sup>68</sup>

<sup>69</sup> Ibid, p. 177—8.

現在の運動には、指導者はなく、階級的利益もなく、今日特定の政党をたて、明日別の政党がそれに代るといふ性質のものでもない、いわば「社会全体を包みこむ」ものである。しかし、大衆は、こうした激励だけでは動かない。革命には、歴史上、流血がつきものであり、「諸国民の間で屢々おこる普通の政治革命では、抑圧者と被抑圧者の双方によって多くの不正が行なわれ、多くの血と富が犠牲にされる」からであり、その結果は別の暴政が続き富の生産者は前より悪い条件につきおとされるにすぎないからである。<sup>69</sup> 暴力的革命は、さきに見た事業の失敗する原因の第一に該当するのである。

<sup>69</sup> Ibid, p. 191. フレイは *governmental revolution* という表現を、力による——多くの場合流血を伴った——政府の転覆という意味で用いている。 *physical revolution* という表現も一ヶ所（二一六頁）用いているが、これも同じ意味である。また、*governmental* という表現は *social* に対立するもの、すなわち、社会経済的諸関係をぬぎにした政治諸関係を指すものとして用いられている。

こうした暴力的革命に対して、フレイが主張するのが、説得であり、等価交換である。労働大衆に重い腰をあげさせるには、社会革命の方が、大衆の日常性に融けこんでゆかねばならぬのである。「力ではなく理性が、強制ではなく得心が、掠奪ではなく購買が、無規律で混沌とした運動ではなく団結した力の組織的な適用が、用い

J・F・ブレイの社会革命論(二)

らるべき正しい方法である。<sup>60</sup>ここで、掠奪ではなく購買が主張されていることに注目したい。現体制を支えているものは、ブレイによれば資本と労働の間の不均衡交換である。これは暴力に支えられてはじめて維持出来る制度であり、国家がその維持の役割を果しているのであった。従って、現体制は本来説得または納得とは無関係な成立ちかたをしているのである。等価交換は、説得、納得の経済的表現である。従って、社会が新しく生れ変わり、そこに第一義的諸原理が実現するためには、その出発において既に等価交換がなければならぬのである。

<sup>60</sup> Ibid, p. 215.

ブレイは、舌打ちしながらも、どうやら労働大衆に社会革命の必要を得心させたようである。だが、それは、社会革命を日常性に融けこませ、それを大衆の日々歩む道のすぐ前にあり、何の危険も困難もなしに入れるものと説くことによってであった。等価交換と腰の重い労働大衆と社会革命を、ブレイはどのように統一するのか、それが次の課題である。

#### IV 移行期の社会(1)、移行の方法

経済的平等を実現するための社会革命を、等価交換の原則にのっとって実行するためには、変革の主体の側に十分な資金がなければならない。オウエン、トムソンらの協同組合社会主義村が失敗したのは、一つにはこの問題でつまづいたからであった。前者は私財を使い果したところで建設が不可能になり、後者は、労働組合の基金作りによる小規模な村の建設を夢みて、まだ基金の集まらぬうちに世を去った。ブレイもこのオウエン型の基金作り―富裕な資本家の出資と、トムスン型の基金作り―労働組合の資金集めが、差当っての方法の一つであるこ

とは認める。但し、前者は結局見通しが立たぬために資金を引き上げられてだめになり、後者は、社会体制を一挙に転覆するにはとうてい不十分で、差当りいくつかの共同出資機関 common-stock institutions をはじめの役に立つにすぎない。勿論これは、正しく設立されれば、やがて現体制を各方向に掘崩し、これを崩壊させるにいたる性質のものであるが、<sup>80)</sup>いかにも迂遠である。さきに引用した、大衆の支持を失って事業が失敗する原因の第二の場合に、この共同出資機関方式は該当する。

<sup>80)</sup> Ibid, p. 128—9.

こうした従来の失敗を繰返さぬように工夫されたブレイの新方式が、資本の有償「国有」化方式である。連合王国の実物資本は五十億ポンドであり、労働者階級の年々生産する富は五億ポンド、うち、労働者階級の取分は二億ポンド、従って、差額三億ポンドを全部労働者階級が貯えて、実物資本購入の資金にあてようとしても、必要額を貯めるには十七年かかる、と計算した上で、ブレイはその有償「国有」化方式の必要な理由と方法を次の如く述べている。

「だが、彼らの地位と背負わされている莫大な重荷とは、彼らに現体制下ではどんなにまとまった額をも貯めさせはしない。そうした方法によってこの体制を覆すことは何世紀も先でなければ望めないし、その間労働者階級の大部分は現社会が彼らに課す苛烈な苦しみを味わい続けねばならない、ということがこれまで明らかにされてきた。しかも、社会変革を成功させるためには、国の実物資本が生産者階級に所有されねばならず、彼らはこの資本を購入せねばならず、彼らは現状では、何世代かかってこの資本を購入するに足るだけの富を貯えることは出来ぬのであるから、生産者階級は、同胞のえじきになり奴隷となったままで

いるしかなく、これは明白である、何か、これまで彼らがとってきたのとはちがう計画を採用するのではない限りは。

そうした計画の発見と採用は別にむずかしいことではない。目的を果すために、ちょっと次のようなことを仮定してみよう——すなわち、生産者階級の中に社会変革の欲求があまりなくゆきわたっていること——各産業には、将来の組織の芽が既にあること——それぞれからの代表による臨時政府が任命され会議をもつこと——労働量とスターリングという二つの貨幣表示をもつ紙幣と陶貨が現在の通貨を廃止し将来の社会の取引を荷うために創造されること——そして、こうして団結した生産者と資本家の間で契約が交され、固定資本が後者から前者に移されること。」<sup>(82)</sup>

<sup>(83)</sup> Ibid, p. 171—2.

つまり、労働者代表による臨時革命政府が出来て、新通貨が発行され、それによって実物資本の買収が行なわれるというのである。おそらく、フランス革命におけるアッシニア紙幣の発行とオウエンの労働貨幣がこの構想の土台となっているのであろう。だが、こうした社会変革が資本家側にとっては階級の存立を否定するものであり、とても応じられぬ取引であることは確かである。こうなると、ブレイはさすがに開き直る。資本家には、本来、土地に対してもその莫大な蓄積資本に対しても正当な所有権はないのであって、単に従来の慣行からそうなっているにすぎない。公共の利益に反する場合は個人の財産を所有者の同意なしに一定の価格で強制的に買い上げる事が出来るのが従来の慣行であり、資本についても事態は同じであると。だが平和と幸福のためには前述の方式による取引が無難なところだというわけである。<sup>(84)</sup> こうしたブレイの「強気」を支えるのは、各種の組織に

属している三五〇万の労働者とそれに続く八、九百万の婦人子供である。この大軍が自分たちの状態について自覚し、変革を求めれば、何一つとして不可能なことはない、とブレイは期待もし、もどかしがりもするのである。

63 Ibid, p. 174.

64 Ibid, p. 175.

## V 移行期の社会(2)、その効果

理想社会実現のための一段階として移行期の社会を設定するというブレイの構想には、そのモデルこそオウエンの協同組合方式であるが、それを越えたブレイなりの前進が見られる。

この最も完全な形での共同所有と平等な権利の樹立のための準備段階 preparatory step は、「まるで踏み固められた既によく知られている道路を進む」<sup>65</sup>ような、あぶなげのない試みであって、始めにこそ、その新しさの故に人を驚かし、怖れさせるかもしれないが、注意深く検討すれば皆安心する筈のものである<sup>66</sup>という。その大要は次のごとくである。

この社会では、土地と実物資本 real capital (＝固定資本 fixed capital)<sup>67</sup>が社会全体の所有になり、全社会のために用いられる。この資本は現在の所有者から購買されるが、購買するのはこの共同体 community の生産部門の人々である。この生産部門は、株式会社の方法 the manner of joint-stock company にまねた無数の小組織に分割され、その各組織は、それぞれの実物資本額に相当する大きさの流通手段を創造し、これを用いて各組織は、労働時間と賃金額に基づく統一的な基準で取引を行なう。さらに「共同の国民基金が設けられ、それで

公共施設の建設、政府の運営、全人民のための教育、両親や身よりのない幼児、老人の保護、財産の保障その他<sup>68)</sup>を行なう。

<sup>68)</sup> Ibid, p. 158.      <sup>69)</sup> Ibid, p. 193.

<sup>69)</sup> ブレイは、資本を蓄積された労働または将来の生産のために生産されたものと規定し、資本を二種類に分け、①固定資本 fixed capital, ②再生産可能資本 reproducible capital とする。後者に入るのは原材料および労働者の生活資料である。また、これらを「生きた言語」になぞらえれば、貨幣は、これらを書きあらわすための手段たるアルファベットのような役割を果すものとされる。こうした貨幣観、資本観は、ブレイが当時の経済学の常識的な水準には達していたことを示す。Ibid, p. 140-1.

<sup>70)</sup> Ibid, p. 193.

この社会は「生産諸力の共同所有 common property と結びついた生産物の個別の所有 individual property in productions」<sup>70)</sup>を認める社会である。後述のように、ここにも、バブーフ、ブオナロッティとことなるロベスピエール、オブライエンの影を見ることが出来る。

<sup>71)</sup> Ibid, p. 194. また、次のようにも云う。

「この共同出資制度の下では、現体制の下におけると同様、各人は自由に好きだけ蓄積でき、いつでもどこでも良いと思うときにそれを利用できる。各人の貯蓄はその人のものであって、決して仲間の貯蓄に影響を与えない。何故なら、平等な交換と各個人の個々の自立 individual independence of individual が富を不幸の手段とすることを殆んどなくしたからである」Ibid, p. 168. ここには、単に、踏みなれた道の安全性を労働大衆に説いてきかせるといかに留らず、共同体における個人と社会とのかわりかたについての基本的な洞察が示されているように思わ



れる。

この社会の生産の仕組みは、オウエン、トムスの自給自足の小共同体の集合ではなく、社会的分業の確立した社会であって、一、食料生産、二、毛織物生産、三、木綿工業、四、内国流通、五、外国貿易の部門からなり、相互に、市場で、労働を基準とした価値額で取引される。これが、当時の経済学者の側からのマルサス主義的対論（トレンズ、マカロック、リカードらも含めた）、即ち、小共同体での自給自足は、人口増加をもたらし、全成員に農業を強制しスミスの分業の利益を放棄させることによって、貧窮にあえぐことを余儀なくさせる、という議論（トレンズのオウエン批判をその典型とする）<sup>(70)</sup>に対する一つの反論も意図していることは明らかである。

<sup>(70)</sup> Ibid, p. 180—1.

<sup>(71)</sup> Lionel Robbins, *Robert Torrens and the Evolution of Classical Economics*, London, 1958, p. 278—280.

Labour's Wrongs, p. 132. には社会的分業による困難の解決が示されたあとで、「孤立した共同体の成功を妨げる  
ゆゑに、この種のいろいろな困難は、諸共同体の体制 a system of communities には存在しない」と指摘され  
る。c.f. Ibid, p. 188.

では、この社会の運営はどのような財政的基礎に立って行なわれるのであろうか。国民基金という、ペインを  
思わせるような示唆はあるが、直接彼が考えているのは、個人への直接税、消費財への課税、地代、家賃への課  
税などである。これが、無償教育、病弱者の保護、科学研究の遂行、住居の取こわしと再建、道路その他の建設  
などにあてられる。<sup>(72)</sup> また、保険制度により、事故、災害、老齢などの保障が工夫されている。<sup>(73)</sup>

J・F・ブレイの社会革命論 (二)

J・F・ブレイの社会革命論(二)

(2) Ibid, p. 169.

(3) Ibid, p. 168.

こうした社会を構想して、ブレイがそれに寄せている期待、それは、ここでこそ、労働者は精神的に成長し、新しい社会を作るにふさわしい力をもつ層が育ってゆくことである。特にこれについて、ブレイの強調するのは、子供たちの教育である。現体制下での労働者の劣悪な条件は、単に彼らを墮落させたばかりでなく、親としての彼ら子供たちを保護し教育するにも不十分、不適格な存在にしまっている。婦人は更にひどく、そうした男たちより更に知的、人格的に劣る存在ということにされてしまっている。彼の構想する社会では婦人は経済的にも男達から独立でき、仕事仲間として男達と対等な位置に立てる。子供たちも同様であって、すべて社会の子として育てられ教育されねばならぬ。そうした社会では両親は、物質的な心配から解放されて、ただ、おしみなく親の愛を子に注げることになる。今は、母親は、無知、無教養のまま、子供に接し、育てることで、救い難い世代の再生産を行なっているが、こうした悪循環は断ちきられ、人間はその本来の英知に輝くように育てられ教育されてくることになる。<sup>(4)</sup>

(4) Ibid, p. 164-168. Voyage from Utopia, p. 108. ブレイは、婦人解放の問題を、単に婦人の人間としての権利を擁護するに留らず、無知、無権利なままにおかれる婦人たちは、まさにその故に、支配の再生産の要になっているという観点からとらえている。このことは特に「ユートピアからの航海」に強く示されている。ブレイのこの観点は、社会変革と婦人解放問題とを統一的に把握するものとして、詳細な検討、評価に値するものと思われる。次節にはその一部が予定されている。

移行期の社会について、ブレイの構想し提示している問題はまだまだ多くあるが、そのいくつかについては、次節で更に検討することになる。ここでは、教育に加えてこの社会のもたらす生産力増加についてのブレイの見通しを見て、差当りのむすびとしたい。

「富の性質と起源に関する考察は、共同体制度 *system of community* の下では、今後数千年にわたって生れてくる全人類の必要を満すに十分な生活資料を生産する力が社会にある、ということを示している。生産は現在無数の鎖で縛られている——それは社会全体に依存するのではなく、特定の階級の命令を待っている——そして、それをとじこめているきずなを打ち破り、今は分割され敵対的になっている諸力を集め、結びあわせる代りに、経済学者たちは、人口を、制限された生産能力にあわせて制限しようとしているのだ」

⑨ Ibid., p. 189.

人口論の立場からする社会主義批判は、社会主義者達に、それぞれの歴史観に規定された、相ことなる反応をよびおこした。ゴドウィン、トムスンらがその一方であって、彼らは自発的な人口制限による困難の回避に期待をかけた。他方、オウエンらは、生産力の発達に期待することで人口圧の脅威をしりぞけた。ブレイもこの後者の系列に属するといえよう。

— 未 完 —